日本文学全集
42

島崎藤村
(三)

春・新生

河出書房

島崎藤村（三）

カラー版日本文学全集 42

1970©

昭和四十五年十一月二十日　初版印刷
昭和四十五年十一月三十日　初版発行

定価　七五〇円

著者　島崎藤村
発行者　中島隆之
印刷者　草刈龍平
装幀者　亀倉雄策

本文印刷　中央精版印刷株式会社
口絵印刷　凸版印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロース　日本クロス工業株式会社

発行所　株式会社　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話　東京(292)三七一一(大代表)　振替　東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0393-331142-0961

目次

島崎藤村(三)

春……五

新生……二五

注釈　紅野敏郎　三三八

解説　小島信夫　三五三

巻頭写真　畔田藤治

色刷挿画　春　須田寿

新生　大森啓助

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

島崎藤村

(三)

春

一

「岸本君*、七月二十二日*に東海道の吉原*まで来たまえ。その日を期して東西から富士のもとに会することとしよう。君の都合もあろうと思うから為替で旅費を送る」

こういう意味の手紙が東京にいる友達から行ったので、いよいよ岸本も西の方の旅*から帰って来るという報知があった。東京の友達はそこで新橋を発つ。一行三人、青木、市川、菅――岡見兄弟*は都合があって加わらなかった。

連中が東海道を下った頃は明治二十六年の夏である。大分その日の汽車は込んだ。一行は疲れて吉原の宿に着いた。

会合の場所は街道筋によくある普通の旅人宿である。二階建の離座敷があって富士は好く見えた。三人が占領したのはその二階の一室で、離座敷の方には他に泊客もない様子。時々顔を出す四十恰好の家婦より外に放肆な雑談を妨げるものがなかった。結句気楽な宿である。汚れた畳の上に寝転びながら、三人は岸本の来るのを待っていた。

「最早見えそうなものだなあ」

と言って青木は身を起した。

青木は痩ぎすな方で、新しい紺飛白の単衣を着て、兵児帯を無造作に巻付けている。寛げた懐からは白い夏シャツがあらわれていて、その紐釦の外れたところに、すこし胸の肌が見える。この男の物を視る眼付、迫った眉、蒼ざめた頬、それから雄々しい傲慢な額なぞの表情は、傷つけ破らざれば休まずとでも言ったような、非常に過敏な神経質を示していた。懺悔するような口元には何となく人の心を牽引けるところがあった。それを見ると、世の中の惑溺や汚穢を嘗め知った人の口唇を思い出させる。そこから力の籠った声が出る。

「岸本君も困るでしょうね」と青木は市川の方を見て、「これから将来どうする積なんでしょう」

「さあ」市川も身を起した。

「そう何時までも岡見君の世話になってはいられないだろうし」

「実は僕もそれを心配しているんです」と言って市川は青木の顔を眺めた。

市川は高等学校*の制服を着けている。薄鼠色の夏の上衣に包まれた優雅な体格、短く黒い髪、蒼白く広い額、鷹の嘴を見るような隆い立派な鼻――すべて彼の風貌に顕れたところは、東京の下町で堅気な家庭に育った人であるということを思わせる。彼の細い柔輭な眼は、大人のような思慮を表していて、若輩ながらに世上の人を睨むと言ったような風があった。三人の中で、この男が一番年少*である。

青木は粗末な煙草入を取出して、鉈豆煙管でスパスパやって、

「しかし面白い変化さねえ、岸本君が家を飛出すなぞは」こう言出した。

「どうしてあの男が旅に出る時の勢は凄じいものでしたよ」と市川は友達が出奔の当時を想い浮べるような眼付をした。「麵麭は天にあり、*てなことを言って――」

「ははははは」

青木は嘲るような声を出して笑った。

こういう談話の間、菅は横になったまま身動きもせずにいる。

「菅君は可羨しいねえ」と青木は考え深い眼付をしながら、「実に菅君は平和だ」

「先刻から寝つづけじゃないか」と市川も笑う。

「僕は眠っていやしないよ」と菅も笑出した。「こうして、君等の談話を聞いているんサ」

二

菅は寝返りを打つようにぐるりと身を返して、やがて俯臥のまま頬杖を突いた。彼は寝ながら謹聴という態度を執った。心の好いこと無類というこの青年の眼には哲学者のような沈静がある。彼はまた年に似合わず毛深い方で、腮の辺なぞは奇麗に剃立てているが、濃く厚い鬚の痕は青々と人の眼についた。連中で彼を好かないものはない。彼は年寄にも子供にも好かれそうな性質である。

その時、市川は嘆息して、「実は僕も、もうすこしで岸本君の後を追うところだったのです」

「君もそういう気になったかねえ」と青木は同情のある語気で言った。

「なにしろ僕のところなぞは事情の多い家庭で、姉と養子の折合は好くないし」と市川は言いかけて、暫時対手の顔を眺めて、

「姉は又、何事も知らないものですから、一途に僕を頼りにしてるんです。僕が旅にでも出てしまおうものなら、後はどうなるか知れない。今一歩——というところで、僕は考えました」

「そこで考えるのが至当だね」

「岸本君の行き方はそうじゃない。あの男が考える時分には、最早一歩踏み出してしまってる」

「そんなら見たまえ」と青木は力を入た。「岸本君のように破って出ようとしたところで——畢竟どうなる。そこが悲しいところさネ。束縛という執念深い奴は何処までも人間に随いて廻るよ」

市川は胸を突出して、「とにかく、危険い芸を演ったものだ」

「ははははは」と青木は苛刻い声で笑い出した。旅の友達のために哭く心と、局促とした自分の身を嘲る心と、この二つが今彼の胸には一緒になっている。

「さすがの岸本君も弱って来るだろうなあ」と市川が言った。「行くところまで行って見なければ承知しないという男だ」

「あの男は昔からああいう風でした」と菅も寝ながら腮を突出す。

青木は癖のように頭を振って、「僕に言わせると、あまりに先生は熱し過ぎる。熱するのは面白いが、馬車馬ではツマらん」

「馬車馬！」市川は横手を打った。

「ああ固くなってしまっても困りものだ」と青木は笑いながら、二人の対手の顔を見比べて、「どうでしょう、君、ああいう男には少許酒でも飲ませて見たら。ははははは」

「酒を飲ませるか——こいつは面白かろう」と菅は笑いながら身を起す。

「菅君がこういうことを言出すからねえ」と市川も一緒になって笑った。

不図物の音がした。

市川はそれを聞きつけて、耳を澄していたが、人が来たのでも何でもないと解った時は、菅と顔を見合せて笑った。待っても、待っても、岸本は見えなかった。

「君、君」と青木は待ち倦んで、「こうしていたっても仕様がない。すこし其辺を散歩いて来ようじゃないか」

やがて三人は連立って二階の梯子を降りて行った。

三十分ばかり経って、この宿へ来て草鞋を脱いだ一人の青年がある。久留米飛白の単衣に角帯を巻付け、夏帽子、脚絆、尻端折という風体で、肩へ掛けるようにした風呂敷包二つ、他には大和の檜木笠も携えて来た——この男が岸本だ。彼は二階へ案内され、そこで脚絆の紐を解いた。さあ、友達は容易に帰って来ない。青木や市川やそれから菅の置いて行ったもの、洋傘だの、手拭だの、その他手荷物の類が室内に散乱っている。急に熱い涙が岸本の頬を伝って流れて来た。彼は自分の汗臭い風呂敷包に顔を押宛てて、激しく泣いた。

三

「あれ程苦労して来ながら、こういう光沢でいるんだからねえ」と市

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

川は意味ありげなことを言って、久しく逢わなかった岸本の顔を眺めた。散歩に出掛けた三人は宿へ引返して旅の友達を取囲いたのである。

紅く泣腫れた岸本の頬は先ず三人の心を動かした。彼の粗く剛い髪、大きな鼻、体軀の割合に幅の広い肩なぞは、寒い山国の生れということを示している。傲岸であると同時に柔弱な、過激であると同時に臆病な、感じ易いと同時に愚図々々した*――こういう憐むべき性質は、彼の容貌を沈鬱にして見せる。彼と、菅とは同窓の友であった。

「旅費まで送って貰って済まなかったね」と岸本はかしこまったように坐り直した。彼は難有いという面持で、可懐しい友達の前に手を突いた。

菅は気の毒そうに、「あれは青木君から、君の方へ送ったんです」

「恐しく物堅いねえ」と青木は笑った。「まあそんなことはどうでもいいさ」

長い旅の話が始まった。三人の友達は熱心に岸本の顔を熟視った。家を出、職業を捨て、友達と離れて、半歳の余も諸国を流浪して来たということは、岸本が精神の内部をよく説明していた。それほど彼は動揺していた。彼が漂泊したところは東海道から西の方で、熱田から便船で四日市へ渡る、亀山というところに一晩泊る、それから伊賀近江の国境を歩いたが、その間には種々な寂しい悲しい旅の思を経験した。黒ずんだ琵琶湖の水を眺めた。西京の旧い都も見た。須磨の海岸には暫時逗留していたこともあった。彼は又、伊予行の汽船に乗った。それは旧友の足立を訪ねるためであった。そればかりではない、彼は大和の方へも一月余の旅をして、吉野の宿で岡見の兄に邂逅った。

琵琶湖に近い茶丈の生活*はまだ岸本の眼にあった。彼が西京から湖水の畔へ引返して、それからこの吉原へやって来るまで、二月半ばかりの間は茶丈を一間借りていた。その頃は自炊だ。終には小炉を煽ぐのも面倒臭くなって、三度三度煮豆で飯を喰ったこともあった。亭主というは大工が本職で、傍寺へ納める花を作ったし、内儀は内職に螢の籠を張る、子息は大津の下駄屋へ奉公している、こんな人達と岸本はしばらく同じ屋根の下に暮した。そのうちに、蛙が鳴出す、螢が飛んで来る。蚊に責められるのが苦いから彼は自分で紙帳を張って、裾へは古銭を飯粒で貼付けて、渋団扇でバタバタ風を入れてはその内へ入って寝た。「ソラ、また始まった」と家の人達が聞きつけてクスクス笑ったものであった。内儀はよく時の惣菜などを皿に盛って持って来てくれた。ある晩、亭主が大津の方へ行った留守に、紙帳の外で「岸本さん、岸本さん」と呼ぶ声がする。岸本は黙って震えていたが、それから急に可恐しくなって、丁度友達から為替が来たのを幸、逃げるようにして江州の宿を発った。もっともこんな事は三人の前では話さなかった。

「憐むべき巡礼*だ」

と青木は心に繰返していた。

四

間もなく飲食する物*がそこへ持運ばれた。久しぶりの会合というので、互いに酒を酌みかわした。楽しい、放肆な、人の心を浮々させるような飲料は、結ばれて解けない岸本の胸をも流れたのである。

「菅君はいけないんですか」と青木は盃を差して、「すこしやりたまえな」

「いえ、駄目です」と菅は手持無沙汰に見えた。「僕は奈良漬に酔う方の口なんですから」

「全く菅君はやりません」と岸本は弁護するように言った。「そうそう、菅君と一緒に高輪の蕎麦屋で飲んだことがあった。あの時は君、ホラ、二人で五勺誂えたっけね」

「五勺誂えるやつがあるもんか」と青木は笑う。

岸本は菅と顔を見合せた。菅は笑って舌を出して見せた。

「市川君はいけそうだ」と青木は銚子を持添えて勧めて、「まあ、も

う少しやりたまえ」
「僕は蒼くなる方です」と市川は両手で頬を押えて見る。
「蒼くなるのは強いんだそうだ」と菅が物を頬張りながら言った。
「一体、市川君は何歳でしたッけ」と青木は何か思出したように、
「僕は未だ君の年齢をよく知らない」
「僕ですか」と市川は笑って、「僕は二十一でさ——たしか岸本君は明治五年でしたね、僕は六年だ」
「そうかなあ、皆な未だ若いんだなあ」と言って、青木は菅の方を見て、「菅君はむしろ僕の方に近いでしょう——どうもその鬚の様子では」
「ええ」と菅は笑いながら、青々とした腮の辺を撫でた。
その時市川は眼鏡越に岸本の様子を眺めていたが、妙に意味ありげな微笑を浮べた。
自分の膳の上にあった盃をグッと一息に乾して、それを差しながら、
「岸本君のために西京の健康を祝す」
と乙なことを言い出した。急に岸本は紅くなった。
「西京という人の噂がよく出たッけなあ」と菅も微笑ながら。
「この男もなかなか罪の深い方さ」と市川は岸本の方を見て、軽く対手の膝を敲くような手付をした。「君、君、東京の方で心配してる人がありますよ」
青木も菅も笑わずにはいられなかったのである。
やがて共同の事業の話が出た。彼等の中には早くから社会に出て働いているものもあり、未だ親がかりで学校へ通っているものもある。境遇は区々である。岡見兄弟の家というは日本橋大伝馬町の鰹節問屋であったから、一切の費用は其方で持出して、雑誌を出すことにしたのがその年の正月——丁度、連中の一人の岸本が旅に出たと同じ月であった。
酔が廻るに随って余計に遠慮がなくなって来る。岸本が旅で書いた稿の中にある笑うべき文句の真似なぞが始まる。菅や市川は盛んにそれをやり出した。「馬車馬」という言葉も幾度か繰返された。眼の両側へ手を宛行って、鼻息ばかり荒く駆出して行く獣の光景なぞを見せつけられるので、岸本はもうショゲ返ってしまった。青木は又、聞いて貰う積で、自分の書きかけの草稿を風呂敷包の中から取出して読んだ。
それは元禄の大家が明治の代に復活った頃であった。外国の文学も次第に海を越して入って来た。
英吉利の詩歌——殊にシェクスピアの戯曲は青年の間に読まれた。よく連中の話頭にも上る。
その日も、青木は『ハムレット』の悲劇を持出した。彼は横浜で西洋の俳優が演じたのを見たという。その舞台面の話から始めて、ハムレットに扮した男の身振手真似までやり出した。さあ、他の友達は眼を瞠る。中には口をモガモガさせて物を食いながら彼の方を観ているものもある。力の籠った青木の声はあの名高い独語を暗誦するに適していた。彼は西洋人の寝言を借用して、実は自分の胸の底に蟠る言難い思を伝えようとするらしかった。その時、胸を躍らせたは岸本で、青木の言うことが一々思い当る。岸本はこの友達に導かれて、今まで自分が考えていたよりは、更に深く狂皇子の悲壮な精神を感得したような気もした。青木に言わせると、ハムレットは最も悲しい夢を見た人間の一人である。この最も悲しい夢を見たという言葉が、妙に岸本の胸に響いた。青木は科白を遣っているのか、自分を白状しているのか、解らなかった。彼の眼——狂熱の光を帯びた彼の眼は燃え輝いた。彼は冷くなった酒を飲んで、嘆くように笑った。
菅は足を投出しながら見ている。

五

ハムレットを見せた青木は更にオフェリヤを見せると言出した。彼は酔って起ち上った。花束のかわりに白い帕子を振って、清しい声で

歌い出したのはあの可憐な娘の歌である。

"How should I your true love know
From another one?
By his cockle hat and staff,
And his sandal shoon.

He is dead and gone, lady,
He is dead and gone;
At his head a green grass turf,
And his heels a stone.

White his shroud as the mountain snow,
Larded with sweet flowers;
Which bewept to the grave did go,
With true love showers."

右訳歌

「いづれを君が恋人と
わきて知るべきすべやある。
貝の冠と、つく杖と、
はける靴とぞしるしなる。

かれは死にけり、我ひめよ、
かれはよみぢへ立ちにけり。
かしらの方の苔を見よ、
あしの方には石立てり。

柩をおほふきぬの色は
高ねの花と見まがひぬ。
涙やどせる花の環は
ぬれたるまゝに葬りぬ」

（『おもかげ*』の訳より）

友達仲間でこの歌を愛誦しないものはない。彼等はこの歌を口吟む毎に、若々しい思想が胸の底に湧き上るのを覚えた。市川も岸本も酒の香に酔って、青木の歌に調子を合せた。

「菅君」

こう言いながら、市川は沈着いた友達の手を握った。彼は菅の顔を眺めて、楽そうに身体を動って、やがて笑出した。

「清さんは伝馬町ですか」と岸本は思出したように、市川の方へ向いて尋ねた。岡見兄弟を区別するために、弟の方は清之助の名を呼ぶことにしている。

市川は点頭いて見せた。

「岡見君は――」

「大磯の方でしょう、暫時僕も逢ませんが」と市川は答えた。

その時青木は、三人の若い友達が睦まじそうに語り合う有様を眺めながら、残りの酒をやっていた。連中で細君のあるものは青木一人である。*彼は早く結婚した。二歳になる女の児の親でありながら、ようやく二十六にしかならない。もっとも、年齢順から言うと、岡見の兄*が一番年長者で、この人は三十近かった。例の心やすだてから、岡見翁などと戯れに呼んだものであったが、その翁ですら未だ独身者でいる位で、他の連中と来てはいずれも世帯持の苦労なぞを知らない時代にある。青木は今更のように、若い友達と、妻子のある自分と、その生涯の相違を引比べて見た。

「オヤ」と市川が言出した。「岸本君は煙草を喫み出したね」

岸本は近頃喫むことを覚えたという風で、洋銀の鉈豆烟管でスパスパやって見せた。

「大分手付が好いぜ」と菅は笑って見ている。

「これでも君、余程上手になったんだよ」と岸本は煙を吹いて見せて、「旅に出ると種々なことを覚えるね。どうも手付が可笑しいなんて、西京では笑われた」

「ヨウヨウ」

市川は手を打って笑った。

その晩はこういう談話で持切った。彼等は七月の夜の明けるのも知らない位であった。

六

翌々日の朝、四人は箱根へ向けて吉原の宿を発った。各自おもしろい風俗をしていたが、就中青木は尻端折で、毛脛を出して、紺足袋草鞋穿、それに岸本が大和から持って来たという檜木笠を借りて冠った。途次盛んな笑声が四人の間に起った。沼津から三島までは乗合馬車がある。戯れに青木は鞭を執って馬を駆りながら出掛けた。その辺は岸本が旅のはじめに歩いて通った道路である。蠅の群は来て皆なの衣服に取着いた。

三島から山へかかって、午後の三時過には一同元箱根の宿にあった。一夏箱根に夏期学校*のあったことがある。その時分、菅と岸本とはこの宿に泊っていたので、老婦とも心易い。その日も直に湖水に面した座敷を二間明けて貸してくれた。粗末ながらも褞袍を出して、風呂を焚いて、夜具蒲団一切で、一晩三十銭ずつの約束とは、諸色の安い頃である。

山の上は冷しかった。木の葉の混った山家らしい風呂を浴びた後、旅慣ない市川は痛そうな顔付をして、水膿れのした足の肉刺を苦にしている。

菅は看て取って、「君、煙草の脂を挺って貼ると好いよ」

「ナニ、そんなことをしないでも、切って水を出すのが一番だ」と岸本が言う。

「咎めやしないかナ」と市川は顔を顰めながら。

「大丈夫、まあ僕に行らして見たまえ」

と岸本は小刀を取出す。市川は両足を友達の前へ投出して、

「どうしても違うなあ、そこは経験があるからね」と言って笑った。

何となく部屋の内は湿気臭かった。屋根の上の方では、しきりに鶯や郭公の啼く声が聞えた。四人は胡座をかく、寝る、思い思いにやって、空想を誘うような鳥の歌に耳を嬲らせていた。急に市川は横手を打った。彼は何かめずらしい事実でも発見したかのように叫んだ。

「確かに細君以上だ」

こう言出した。

「よく君は人を喫驚させる」と言わぬばかりに菅は振向いて見る。

「菅君、菅君」と市川は岸本の方へ指さしながら、「この着物は西京が縫ってくれたんだとサ」

「へえ」と菅は面白半分に。

岸本は苦い顔をした。「市川君、そう君のように言うから困る。実際僕は西京の世話になったよ、着物の事から、何から——一切」と彼は妙に生真面目な調子で、

「僕も君、旅に出て他に頼る人がなかったもんですから、それを西京も気の毒に思ってくれたんでしょう」

連中の談話に土地の名が出る時は、必と何か謂があった。これは仲間内の符牒のようなものである。

「まあ、そう弁解しないでもいいさ」と言って市川は岸本の顔を眺めたが、やがて同情のある語気で、「真実なんですか、西京が君に懐剣を贈ったとか言うのは」

「ええ」岸本の顔は紅くなる。

「どういう積りでああいう物を君に贈ったのか、それを西京に聞いて見たいッて、しきりに岡見君がそう言っていましたッけ」

「あれは母親さんの形見なんだそうです」

「形見？」今更のように市川は事の真相を看破したらしく点頭いた。

「しかし、君も非常な難局に立ったものさ」

岸本は黙って爪を嚙んでいる。

「まあ、聞きたまえ」と市川は言葉を続けた。「あれから岡見君が盛岡を呼寄せて、何とか貴方も心を決しなければなりますまい、実は岸本君はこれこれです、と言って聞かせたという話サ」

例の符牒が復出て来た。

「すると、盛岡が対手の名前を聞きますから」と市川は手真似をして見せて、「それは貴方が日頃姉さんのように思ってる人です、と言ったんだそうです。西京と聞いた時は、さすがの盛岡も柳眉を逆立てたという話でしたッけ」

急に若々しい血潮が岸本の頬に上った。その時高い笑声が青木と菅の間に起った。市川も二人と顔を見合せて笑った。

「ですから」と岸本は言いかけて、困ったような顔をしていたが、やがて決心の籠った調子で、「僕は盛岡に逢って見る積です。逢って何もかも話す積です。その積で今度出掛けて来ました」

「青木君」と市川は振向いて言った。「どういうことになるでしょう、是方が盛岡に逢って見るとしたら」

「盛岡かい？」と青木は戯語のように、「そりゃあ君、岸本君でなくッちゃあならないと言うに極ってるサ」

「ヒヤヒヤ」市川は笑い転げた。

七

青木は瞑想的な眼付をしながら、若い友達の談話に耳を傾けた。彼が今、背負っている重荷は、群って集って他から無理に背負わせられたようなものではない。彼の早い結婚は決して強られた儀式ではなかった。細君の操を迎えるに就いては両親はむしろ反対した位である。操は実に彼の恋女房である。二人が耶蘇の会堂へ急いで、そこで結婚の式を挙げる前、いかに相思の情の濃やかであったかということは、こう青木が白状しているので知れる。

「もし我が彼女に会わぬ前の事を思えば、侘しげなる野中の松に風の当り易きがごとく、世の事物に感触すること多かりし。彼女の情を得たる後は、物として春の色を帯びざるはなく、自ら怪しみて霞の中に入りたるかと思わるる程に、苦く辛く面白からぬ物に隔たりて、甘く美しく優しき物にのみ近きぬ。肥太りたる駒にうち乗りて、春の野に遠乗したる時、菜の花の朝日に照りかがやきたる畦を過ぎて、緩々と流るる小河の岸に駒を立てたる心地は——此恋の真味なり」

恋愛は剛腹な青木を泣かせた程の微妙な音楽であった。この世に属いた物と言えば、名でも、富でも、栄花でも、一切希望を置かないと言ったような、一徹無垢な量見から、実世界の現象悉く仮偽であるとまで観じた程の少壮な青木ではあったが、唯一つ彼の眼中に仮偽でないと見える物は恋愛であった。彼のように恋愛の思想を重んじ、またそれを憚らず発表したものも少かろう。彼に言わせると、恋愛は人世の秘鑰である。恋愛あって後に人世がある、恋愛を抽き去った日には人生何の色も味もない——

不思議なことには、恋愛が造作もなく彼の眼を眩ましたように、結婚はまた造作もなく彼の心を失望させた。彼は厭世詩人に就いてこんなことを言った。「そもそも彼等は社会の規律に遵うこと能わざるものなり、社会を以て家となざざるものなり。普通の快楽を以て快楽と認めざるものなり。彼等は繩墨の規矩を厭離するの思想こそあれ、人世に羈束せられんことは思ひも寄らぬところなり。婚姻が彼等をして一層社会を嫌厭せしめ、一層義務に背かしめ、一層不満を多からしむるもの、是を以てなり」と言ったり、又、「ああ不幸なるは女性かな、厭世詩家の前に優美高妙を代表すると同時に、醜穢なる俗界の通弁となりて、其嘲罵する所となり、其冷遇する所となり、終生涙を飲んで寝ての夢覚めての夢に、郎を思い郎を恨んで、遂に其愁殺するところと成るこそ、うたてけれ」と言ったりしたのは明らかに彼の心中を暴露したものである。

暫時青木は茫然と三人の友達の様子を眺めたが、旅から帰った岸本が唯其処に坐っているとは思わなかった——彼は眼前に往時の自分を

視るような気がした。

蘆の湖に面した方の障子が一枚明いていて、その間から深く青い水が見える。冷々とした空気は部屋の内までも入って来た。

八

「ああ」と市川は嘆息して、談話を続けた。「岸本君のような寂しい旅に出て、思いがけない親切な人に邂逅して見たまえ。ああいうことになるのは当然だ——菅君まあそうじゃないか」

「はははは」菅は冷静な門外漢という態度でいる。「こりゃあ経験のある者でなければ解らないことだね」

「どうも胡散臭いと思ったよ」と市川は笑って、「岸本君が大和から送って寄した論文なぞは余程怪しかった」

「あれは、少々申訳の気味だね」と菅も笑う。

「オイ、岸本」と市川は友達を抱寄せるようにして、「そう君は考え込むからいかん。苟くも何事かしようという男児が女子の一人や二人位葬ったッて何だ」

「市川君はなかなかエライことを言う」と菅は濃い眉を動かした。

何時の間にか湖水の面が寂しく光って来た。灰色の靄は低く垂下って、対岸の眺望を奥深く見せた。山の上で鱒の音もする。

「市川君」と岸本は思出したように、「伝馬町は別に変りがありませんか」

と尋ねた。伝馬町はやはり例の符牒である。市川は笑って答えなかった。彼はすこし顔を紅めながら、堅く岸本の手を握った。

「君は女というものをどう思う」こう市川が言出す。「どんな良い家庭に生れて来た人でも、何処かに女郎のような性質を備えてるね」

「さあ——」

と言ったっきり、岸本は返事に困った。彼は市川の口唇からこういうキビしい言葉を聞こうとは思わなかった。何故市川がこんなことを言出したか、それが岸本には種々の意味に酌れた。彼は、この慧眼い友達と違って、飽までも人の心を頼もうとしている。

「何と言っても、貧乏書生じゃ駄目だよ」と市川は冷嘲を帯びた語気で言った。「しかし盛岡にしろ、西京にしろ、普通の女とは仕込が違う。関根さんや岡見君なぞに教育された人達だから、それで君等の心情も解るんサ。もしそうでなくッて見たまえ、いくら君が——」と言いかけて、急に話頭を転えて、「それはそうと、岸本君、加藤さんという人がお嫁に行ったそうだよ、なんでも法学士か何かの許へ」

「加藤さん？」岸本はボンヤリした顔をしている。

「ホラ——学校にいたでしょう？　君の心は最初彼女の方へ行きそうだ、こう思って岡見君なぞが見ているうちに、ずっと盛岡の方へ傾いじゃった。はは、まあそういう噂でしたッけ」

岸本は最早その人の名さえ忘れていたのである。言われて始めて思出すと同時に、彼はこの友達に飜弄ばれるような気がした。

「君、君」と市川は戯れながら、「西京のような人は、まあ別物として、他に一寸した風流は幾何もあったんでしょう——はははは、だって君、旅の身じゃないか。すこし聞かせてくれてもよさそうなものだ」

「謔語言っちゃいけない」

こうは言ったものの、岸本は腹の中でこの友達の言うことを笑えなかった。彼は市川の鋭い睨み方に驚かされた。実際、彼の馬鹿らしい性質は旅に出て幾人の女にホレたか知れない。思出して見ると、最早忘れている人は二人や三人ではなかった。彼は自分で自分の性質を羞じた。

九

その晩は湖畔の宿で四人枕を並べて寝た。翌日、青木は東京の方へ向けて発つと言出して、彼の発議で、昼すこし前から酒を取寄せた。青木は送られる人、残りの三人は送る人、それで万事書生流儀に送別会のようなことをやった。もっとも送別会と言っても名ばかり、名物

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com